

はじめに

50年以上変わらない幼児教育の実態

大学を卒業した直後に、私は幼児教育の現場で子どもたち相手に授業をはじめました。それから46年が過ぎようとしています。時の経つのは早いものです。

この半世紀の間にわが国では、政治・経済・社会のなかでさまざまなことが変化し前進してきました。しかし、幼児教育の世界はこの間、ほとんど変化が見られませんでした。旧態依然とした伝統的な「遊び保育」がいまだに主流です。「勉強は小学校へ入ってからでいい。就学前はのびのびと遊びながら身体からだを鍛える時間に使おう」という考えです。

また、この対極にあって、一定の支持を集めているのが、〃お受験〃のために幼児のうちからペーパー問題を解かせる「教え込み教育」です。この二極化が長い間続いてきまし

た。

私が一貫して主張してきた「教え込み教育ではなく、将来自分で考え、自分で判断を下せる人間になれる基礎を育む教育」は、見向きもされませんでした。しかし、AI (Artificial Intelligence) によるイノベーションは新しい人材を求めています。言われたことをやるだけでなく、何をやるべきかを自分で見つけ、考え、付加価値を生み出していけるような能力を備えた人間です。

日本の幼児教育改革には、ある特徴があります。それは、改革案の論議の中に制度的な話はあっても、教育内容に関するものはあまりない、ということ。もしかすると、文部科学省の内部では語られているのかもしれませんが、実際にそうした案が表に出て、われわれ幼児教育の現場にいる者の耳に届くことはこれまでありませんでした。

日本の幼児教育は、複雑な行政の中で翻弄され、教育の自身に関する論議は世界の動きからはずれ、ますます後れをとっているのが現状です。これは、日本人が幼児教育についての関心が薄く、世論の盛り上がりがないせいかもしれません。

しかし、最近では幼児教育に熱心な保護者の方が増えてきました。その方たちが望まれる

ことは、受験のためだけではなく、幼児のうちにしつかりとした基礎教育を身に付けさせたい、というものです。幼児教育の世界において「遊び保育」でも「教え込み教育」でもない、「まっとうな基礎教育」を、という思いです。

藤井聡太さんとモンテッソーリ教育

そんな幼児教育を取り巻く状況の中、2017年に私が興味をひかれるニュースが流れました。将棋の藤井聡太さんの話題です。

史上最年少でプロ棋士となり、中学2年生での公式戦デビューから29連勝、最年少で50勝。これまでの記録を塗り替えた天才です。すごいスターが生まれたものです。

中学生にして並み居る大人の強豪を打ち負かす姿には、将棋ファンのみならず多くの人が目を見張りました。加えて対局後のインタビュの対応も、とても中学生とは思えない落ち着いたもの腰と筋の通った話し方が、世間の注目を集めました。

どうやったらあのような中学生に育つのか。世間の関心は親の育て方や、どういう教育をしたのかに向かい、その中で「モンテッソーリの幼稚園に通っていたようだ」「藤井さ

んが幼児期に受けた「モンテッソーリ教育」が天賦の才能を開花させた」とマスコミで報道されるようになりました。

同時に、子どものころにモンテッソーリ教育を受けた人物として、アメリカ前大統領のバラク・オバマ氏をはじめとして、グーグルの創業者ラリー・ページ氏、マイクロソフトの創業者ビル・ゲイツ氏、フェイスブックの創業者マーク・ザッカーバーグ氏、アマゾンの創業者ジェフ・ベゾス氏、日本でもおなじみの経営学者ピーター・ドラッカー氏などの名前が挙げられたために、いっそうモンテッソーリ教育に人々の興味が集まりました。

藤井さんは、3歳からモンテッソーリの教育法を取り入れていたカトリック系の幼稚園に通ったそうです。この教育法は「自分の好きなことを納得がいくまでやらせ、自立した子どもを育てる」ことを目的としているので、幼くして将棋の面白さを覚えた藤井聡太さんにとって、その才能を伸ばすには適した教育環境だったのでしよう。

藤井さんと直接お話ししたわけではないので断言できませんが、自分の好きな将棋を好きな方法で没頭して身に付けた習慣が、その後の彼の才能を強化したことは想像に難くありません。教え込み教育によってなしたのではないことははっきりしています。

幼児教育によって人生のすべてが決まるわけではありませんが、その後の人間形成に大きな影響を与えることは、世界のさまざまな研究が証明しています。しかも、幼児教育が成人してからの収入や健康にも関係してくるといふ最新の調査結果もあります（後述）。

幼児期に考える力の土台を構築する——教科前基礎教育

私が主宰している幼児教室「こぐま会」では、幼児期からの基礎教育を実践しています。「そんなにあせらなくても」と感じる方もいらっしゃると思いますが、決してそういうわけではありません。こぐま会は「年齢に見合った教育の仕方がある」という思想に基づいて、幼児にも理解できる知的教育を行なっています。

それが「教科前基礎教育」です。幼小一貫教育の理念のもと、小学校に上がる前の幼児期、年少・年中・年長児にそれぞれに施す教育のことです。小学校に上がってからスムーズに教科を理解できるように準備するために、教え込み教育でも、小学校で習うことを前倒しで教えることでも、どこかの学校に入るための特別なトレーニングでもありません。

答えや結論を暗記させるのではなく、藤井聡太さんのように目の前の問題を自分で考え、

何度も考え直して自分で答えを導き出すことができるようにする、思考力を育てる教育法です。どこの学校に入学しても主体的に学んでいける姿勢と、応用課題を受け止める学力の基礎をしっかりと身に付けることを目標にしているのです。

本書では、この教科前基礎教育のための方法論「KUNOメソッド」についてつまびらかにしていきます。

「思考力に富んだ人とはどんな人なのか」という質問を多くの保護者の方からいただきます。われわれが「思考力」を育む幼児教育——と謳^{うた}っていても、どういいう人間像になるのか抽象的でわかりにくいのでしょうか。

そんな保護者の方々の問いに答えるのにふさわしい実例が、あのアップルの創業者スティーブ・ジョブズ氏の言葉にありました。

ジョブズ氏が生前、アップル社の採用試験でもっとも重視したのは、応募者が「セルフ・マネジメントができる人物かどうか」を見極めることだったそうです。

セルフ・マネジメントとは、自分の問題を人に頼らないで解決してゆく能力とか、感情をコントロールして他人と協調して問題に当たる、といったことです。つまり自己を管理

して問題を解決できる能力を持っているということでしょう。

アメリカでも日本でも、これまでの会社は一般的に、上司からの命令によって行動する「他律」的な集団でした。しかし、ジョブズ氏はそういった古い組織ふるから一步先を行く「自律」的な社員で構成される会社作りを目指したのです。そのため彼は応募者を面接した後、仕事の雰囲気味わってもらい、多くの社員と接するために丸一日をアップルの社内で過ごさせたそうです。そこでは応募者の協調性や自主性、リーダーシップの有無などを見極めていたのでしょう。日本で行なわれている小学校入試の行動観察と同じです。

ジョブズ氏は言っています。

「セルフ・マネジメントができる人間は管理される必要がない。彼らは仕事が与えられれば、それをどうやって実現できるか自分で考えることができる人材なのだ」

この話を知ったとき、私が考えてきた子どもの将来の理想的・具体的な姿の一端を垣間かいま見たような気がしました。管理される必要のない自律した人間——という姿です。

AI、人工知能時代の到来は時間の問題でしょう。オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授が発表した研究によると、あと10年か20年でアメリカの総雇用の47

%がコンピューターやロボットに取って代わられると予測しています。つまり47%の雇用が消える可能性があるのです。人工知能の時代と言われても、明確な社会の姿は描けませんが、車が自動運転になり、人と会話のできる機械が人間生活の手伝いをする……人間のやっている作業が人工知能によって代替可能になる社会がくるというわけです。

そして社会は、AI機器を通じて集められたビッグ・データによって、最大公約数的な方向に動いていくと予想されます。そんな中、人間が自律して生きるためには、その包囲から逃れる「思考力」を持つ必要があります。AI社会の出現を前に、世界中がこのような自律した人材の育成に大急ぎで取り組んでいるところです。

われわれが追い求めてきた「思考力を育んだ人間」とは、とりもなおさず管理されなくても与えられた問題を解決できる自律した人間ということができるとしよう。

そういう人間を育てるために、われわれがどのような考えで幼児教育に取り組んでいるのか、その思想から具体的な内容・メソッドまでを紹介し、「思考力に富んだ子ども」を育てるヒントにさせていただければと思います。